



Q 1 「茶どころ日本一計画」って何ですか？



「お茶が育ち幸せな生活」が永く続くことを目的に定めた計画です

平成21年4月1日に施行された「静岡市めざせ茶どころ日本一条例」に基づいた、静岡市のお茶に関する産業の振興と、市民の豊かで健康的な生活の向上を目的とした計画です。

Point 1 「静岡市めざせ茶どころ日本一条例」

静岡市で初めての議員提案による政策条例。

静岡市のお茶に関する伝統、文化、産業などを守り、静岡市を日本一の茶どころとして育て次代に継承していくための基本理念や、茶業者や市民、行政の役割、さらには施策の推進に関わる基本的な事項が定められています。



Q 2 計画のサブタイトル“お茶のまち100年構想”って何ですか？

100年先も魅力あるお茶のまちであることを目指した長期構想です

平成18年5月13日、静岡のお茶が清水港から初めて直接海外へ輸出されて100年という大きな節目を迎えました。

清水港からの直輸出は、茶産業の発展ばかりでなく、関連産業の成長や、港や鉄道などの整備や都市基盤の整備など、静岡市の都市としての発展に大きな影響をもたらしました。

この記念の日、日本一魅力ある“お茶のまち”を目指して、「静岡市お茶のまちづくり宣言」がなされ、その中で、「百年の後も風薫るお茶のまちづくりを目指します」と宣言されたことを受け、平成19年から2ヵ年にわたり官民一体となって「静岡市お茶のまち100年構想」が取りまとめられました。この構想が茶どころ日本一計画の礎となりました。

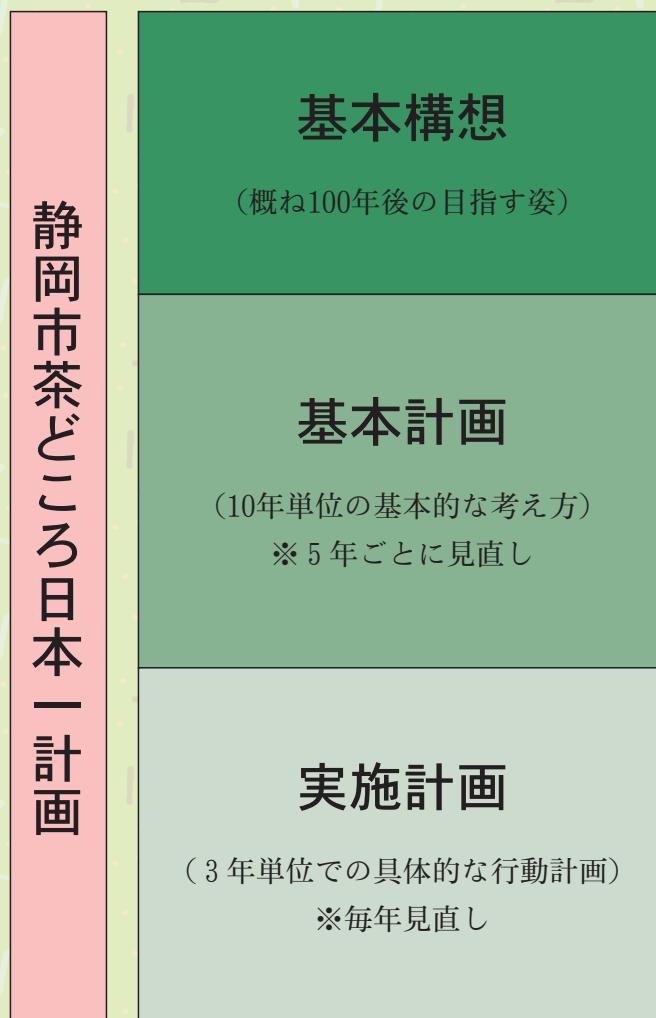
Point 2 「静岡市お茶のまちづくり宣言」

平成18年5月13日に清水港お茶直輸出100周年事業実行委員会（代表 静岡市長）により発せられた宣言。“お茶のまちへの思い”の原点（裏表紙に全文を掲載）。

Q3 この計画の構成はどのようになっているのですか？

基本構想、基本計画、実施計画の3つで構成

静岡市のお茶に関する伝統、文化、産業等を守り、静岡市を日本一の茶どころとして育て次代に継承していくための施策などを定めたもので、「基本構想」「基本計画」「実施計画」の三つから成り立っています。



※本冊子はこのうち、「基本構想」「基本計画」の要点についてまとめたものです。



Q4 どうして「茶どころ日本一計画」ができたのですか？

生産、流通、消費の現場が大きく様変わりしています

かつて日本一の茶園面積を誇った歴史ある茶どころですが、生産現場の縮小、流通の多様化、生活様式の変化など、「静岡市のお茶」はかつて経験のない環境の中に置かれています。

お茶づくりの現場

現状

- お茶収益の低迷
⇒将来への不安と意欲の減退
- お茶づくりの担い手の減少
 - 茶園の老朽化と荒廃
 - 茶園管理の省力化の遅れ
 - 荒茶の生産量減少と個性の喪失
 - 荒茶価格の低迷
 - 山間地の集落機能の低下 など

課題

- ◇担い手の確保
- ◇優良茶園の確保
- ◇顧客志向に基づいたお茶づくり
- ◇個性がわかりやすいお茶づくり
- ◇新茶期に頼らない経営
- ◇地域資源を活かした経営
- ◇他作物への転換 など

お茶流通の現場

現状

- 販売チャネルの多様化
⇒“集散地機能”の低下
- 専門店から量販店販売へのシフト
 - ドリンク需用が拡大から停滞へ
 - 茶問屋・小売店の減少
 - 茶問屋の二極化・寡占化の進行
 - 一番茶荒茶の流通価値が出荷時期で評価される傾向
 - 産地間競争の激化 など

課題

- ◇消費者の多様な嗜好への対応
- ◇生活スタイルに応じたお茶流通
- ◇お茶の楽しみ方の提案
- ◇新茶期以外の需要期の形成
- ◇新たな荒茶・仕上茶の価値評価方法の確立
- ◇ブランド力の向上
- ◇海外需要の開拓 など

お茶消費の現場

現状

- ライフスタイルの変化
⇒“リーフ茶”需要の低下
- ドリンク茶の普及による若者層への緑茶の浸透
 - ドリンク茶の需要の停滞
 - 安心・安全志向の高まり
 - 健康志向の高まり
 - オフィスでの利用減少
 - 食の多様化・飲料の多様化
 - 消費者の低価格志向 など

課題

- ◇消費者が求めるお茶作り
- ◇お茶の多彩な魅力が伝わる仕組みづくり
- ◇独自の茶文化の創造・普及
- ◇お茶を介した食文化の提案
- ◇おもてなし機会の拡大
- ◇地域ブランドづくり
- ◇生産者と消費者の距離の短縮
- ◇消費を引っ張るリーダーの育成 など